

日蓮大聖人御書全集

どうじょうしんしゅごじ

道場神守護事

新版

1320

ς

1321

どうじょうしんしゅごじ

道場神守護事

建治 2 年(’76) 12 月 13 日 55 歳 富木常忍

がもくごかんもん
鵝目五貫文、たしかに送り給び候い了わんぬ。かつ知ろ

しめすがごとく、この所は里中を離れたる深山なり。

えじきぼうしょう
衣食乏少のあいだ、読経の声続き難く、談義の勤め廃しつ

べし。

たくせん　じゅうらせつ　おんはか
この託宣は十羅刹の御計らいにて檀那の功を致さしむる
か。

しかん　だいはち　い
たいしゃく　どう　しようき　うやま　いた
止觀の第八に云わく「帝釈の堂をば小鬼は敬い避くる

どうじょう

かみだい

しんによう

がごとし。道場の神大なれば、みだりに侵嬈することなし。

し。

また、城の主剛ければ、守る者も強し。城の主恆ずれ

まも もの

しろ しゅたけ

しろ しゅお

しろ つよ

しろ だいはち

しろ ひとしょしよう

しろ ひとしょしよう

ば、守る者も忙す。心はこれ身の主なり。同名・同生の
天、これ能く人を守護す。心固ければ、則ち強し。身の神

てん

まも もの

よ ひと しゅご

よ ひと しょしよう

よ ひと しょしよう

よ ひと しょしよう

すら、なおしかり。いわんや道場の神をや」。弘決の第八に
云わく「常に人を護るといえども、必ず心の固きに仮つ

い

かみ まも すなわ

て、神の守り則ち強し」。また云わく「身の両肩の神すら、

つね ひと まも

なお常に人を護る。いわんや道場の神をや」云々。人所生

とき にしんしゅご

どうじょう

かみ

どうじょう

かみ

うんぬん

ひとしょしよう

の時より二神守護す。いわゆる同生天・同名天、これを

俱生神と云う。華嚴經の文なり。

文句の四に云わく「賊、南無仏と称えてすら、なお天頭を得たり。

いわんや賢者称うるをや。十方の尊神もあえて当たらず。ただ精進せよ。懈怠することなけれ」等云々。釈の

意は、月氏に天を崇めて仏を用いざる國あり。しかして、寺を造り、第六天の魔王を主とす。頭は金をもつてす。

大賊、年来これを盜まんとして得ず。ある時、仏前に詣でて、物を盜み法を聴く。仏、説いて云わく「南無とは驚覚の義なり」。盜人、これを聞いて「南無仏」と称えて天頭を

え
きゅうめい
ぬすびと
かみ
え
もう
いつこく
てん
す
ほとけ
き
うんぬん
かれ
とがあ
もの
さんぽう
しん
だいなん
のが
れんか。
しかるに、今示し給える託宣の状は、兼ねてこれを知る。
これを案ずるに、難を却けて福の来る先兆ならんのみ。
妙法蓮華経の妙の一宇は、竜樹菩薩、大論に釈して云わ
く「能く毒を変じて薬となす」云々。天台大師云わく「今經
に記を得るは、即ちこれ毒を変じて薬となす」云々。災

きた

へん

さいわ

じゅうらせつ

い来るとも、変じて幸いとならん。いかにいわんや、十羅刹

か

たきぎ

ひ さか

かぜ

ぐら ま

はか

これを兼ぬるをや。「薪、火を熾んにし、風、求羅を益す」

ことば

しじょう

つ

がた

こころ

これなり。言は紙上に尽くし難し。心をもつてこれを量れ。

きようきようきんげん

恐々謹言。

じゅうにがつじゅうさんにち

十二月十三日

にちれん

かおう

日蓮 花押

御返事

ごへんじ